

# 地域博物館における回想法の整理とその応用

せいがい  
青海 伸一

## はじめに

近年の博物館での取り組みの一つに、過去に使用した経験のある道具を用いて懐かしい思い出を語り合う「回想法」への取り組みが見られる。回想法とは、懐かしい思い出を語ることで脳を活性化し認知症予防にも役立つという、1963年にアメリカの精神科医であるロバート・N・バトラーが提唱した心理療法のことである<sup>1</sup>。博物館では生活に関連する道具の収集や展示を行っており、博物館が所蔵するそれらの道具を用いて、高齢者に懐かしい思い出を語るきっかけを提供し、認知症予防に役立ててもらおうというのが基本的な考え方である。

博物館における回想法への取り組みとしては、現在北名古屋市となっている旧師勝町時代からの取り組みが有名である。北名古屋市においては、北名古屋市歴史民俗資料館（以下「北名古屋市博」という。）で所蔵する資料を用いた回想法を通し、認知症予防に役立てるとともに、地域活動への入り口を提供する「地域回想法」を提唱し、実践がなされている。北名古屋市の取り組みは第2章で詳細を紹介するが、北名古屋市博は昭和日常博物館を名乗り、常設展示では郷土史の展示を行わずに、昭和30年代の日常生活に特化した展示を行っており、その展示と相まって、地域回想法は多くの成果を上げている。

北名古屋市博における博物館と回想法の関係をごく簡単に整理すると、大きく2点の特徴を挙げることができる。一つ目は、認知症予防に役立つ回想法を行うにあたって、博物館が所蔵する資料を提供することである。これは、地域回想法を中心となって行う回想法センターに所蔵資料を貸し出し、回想法センターが主体となってグループによる回想法を実践する際、実物資料を見ながら懐かしい思い出を語ることができるようにしていることである。

二つ目は、博物館における展示が、懐かしさを生み出す工夫にあふれているということである。よくある地域博物館では、地域の歴史を紹介するため、縄文時代から江戸時代を経て太平洋戦争前後までの時代を取り上げるのに対し、北名古屋市博の展示で

は昭和30年代のみに時代を絞り、道具の紹介にとどまらず、街並みの再現や店舗の再現などを行うことで、当時の雰囲気まで展示室において再現している。

この二つの特徴は、博物館と回想法の関係を考える際に重要な視点と考える。それは回想法を実践する場合に実物資料が果たす役割が大きいことから、回想法を行う主体が福祉部門であろうと博物館であろうと、博物館資料を用いることで効果を上げているという事実であり、また博物館の展示を通して自然と懐かしい思い出がよみがえってくるということである。

今回の考察では、これらの視点を踏まえ、北名古屋市の事例を確認したうえで、福祉施設などで行う活動に対し博物館資料を貸し出す事例、博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法の事例、さらに回想法の視点を提示した博物館展示の事例にそれぞれ分けて、博物館がかかわる回想法の特徴や課題について整理を行い、回想法を応用した展示の可能性について確認するものである。

## 第1章 回想法の基本と研究史

### 第1節 回想法の基本

先述した通り、回想法はバトラーによって提唱された心理療法である。

バトラーは、否定的に捉えられがちな高齢者の過去の回想を後ろ向きな行為ではなく、むしろ自然で、老年期を健やかに過ごすための積極的な意味をもつものとして見出し、高齢になり、死が近づくにつれて過去を回想する頻度が高まるのは、自分の歩んだ人生を振り返り、その意味を模索しようとする自然で普遍的な過程であると考えた<sup>2</sup>。こうした高齢者の回想に対して聞き手が共感的、受容的、支持的に係わることで、人生の再評価やアイデンティティの強化、Quality of life（人生の満足度・生活の質）の向上、対人関係の形成をはかろうとする援助方法が回想法である<sup>3</sup>。

この回想法について、福祉の場面で従来から用いられていたのは、治療的回想法と呼ばれるもので、認知症予防を目的とした活動である。多くの場合は、グループ回想法といい、数名のグループに対して、リーダーなどが思い出をよみがえらせるきっかけとなる道具や質問を提示することで、グループ全体の思い出話が盛り上がるようにしながら、脳の活性化を図るという活動である。この活動は、通常一回限りのものではなく、例えば全8回といった形でプログラムを組み、それぞれの回ごとにテーマを設定して行われる。

博物館がかかわって行う回想法は、この認知症予防を目的とした回想法を基に開発された、北名古屋市での活動が先行事例となっている。北名古屋市ではこの活動を「地域回想法」と名付けている。

師勝町（現北名古屋市）で提唱された地域回想法は、回想法の一手法で、地域で行う回想法であり、回想をきっかけとして地域活動を始めるサポートをするものである。認知症の予防効果もちろんあるが、認知症予防に重きを置いていない、あくまでグループの仲間意識の醸成、話のきっかけ作りを提供することに回想法を用いている活動である<sup>4</sup>。

その活動にあたって、北名古屋市博はそういった活動を支援する存在として貸出事業に協力するほか、回想を促す実践の場として機能している。

なお、地域回想法については、来島修志によって次のように定義されている。

「地域回想法とは、回想法を通じて誰もが気軽に身近な地域で、その社会資源を大いに活用し、人の絆を育み地域のネットワークを広げ、いきいきとした『町づくり』に貢献する社会参加を目指すものである。とくに地域で暮らす高齢者にとっては介護予防を目的として、自分の人生を振り返り肯定的に捉えることによって、健やかで豊かな人生を歩みつけていただくことを支援する手段の一つである。また同時に地域のもつ潜在している主体的な力（エンパワメント）を引き出し高めていくことを支援するものである」<sup>5</sup>。

一方で、他の博物館での活動として取り上げられている回想法は、北名古屋市での事例を参考にしてはいるが、博物館職員が認知症予防を目的として行う活動のことを「地域回想法」と呼んでいることが多い<sup>6</sup>。

北名古屋市で行っている地域回想法は、認知症予防の効果はあるものの、認知症予防そのものを目的としていないのだが、多くの博物館では博物館で認知症予防を行うことと捉えられており、そこには認識のずれが生じている。

本稿では、こういった認識のずれが生じている現状も踏まえ、北名古屋市で行われている活動を「地域回想法」と呼び、その他の博物館で行われている活動は「博物館がかかわる回想法」と呼ぶこととしたい。

## 第2節 研究史から見る課題

ここで博物館と回想法の関係について触れているこれまでの研究史を整理しておきたい。

博物館関係者による研究では、松戸市立博物館博

の青木俊也は、松戸市立博物館で昭和30年代の団地を再現している立場から、昭和30年代の再現展示について様々な角度から考察を行っており、それらの考察の1つとして、北名古屋市博で行っている地域回想法での活用等を取り上げた研究を行っている<sup>7</sup>。また、北名古屋市博の市橋芳則は、北名古屋市での地域回想法への取り組みのほか、北名古屋市博が昭和に着目した経緯、地域回想法での具体的な取り組みについて詳細に報告を行っている<sup>8</sup>。さらに氷見市立博物館での活動については小谷超により報告されている<sup>9</sup>。

民具学の分野でも、民具を回想法に活用することがこれからの博物館活動の道を開くという立場に立った考察が岩崎竹彦らを中心に進められている<sup>10</sup>。そのほか関連する民俗学の分野で回想法との関係について述べたものには、介護現場での対応を通して回想法の取り組みに疑問を呈し「介護民俗学」を提唱する六車由実<sup>11</sup>や、回想法に懐疑的ながらも、東日本大震災後の文化財レスキュー活動を通して、民俗学の聞き書きを行う活動が高齢者の回想に繋がることを経験的に示した加藤幸治の事例などが見られる<sup>12</sup>。

回想法自体は、博物館で所蔵する資料を活かして高齢者の認知症予防に役立てることができるという面で、大変意義のある活動である。それに、回想法に取り組むことで、博物館の存在を社会的に価値あるものとして認識してもらえるという点でも貢献し得る活動と考えられる。

しかし、博物館はいうまでもなく教育施設である。にもかかわらず、本来の博物館活動が実は福祉分野にも役立つというのなら話はわかるが、これまで筆者の見た範囲では、博物館は認知症予防のために回想法に取り組むべきだという方向ばかりで、これでは博物館は福祉のための施設と化してしまうのではないかとさえ感じられる。

仮に、博物館が福祉のための施設としての道を選ぶにしても、これまで語られている博物館がかかわる回想法は、現在の高齢者を対象としたものであって、そのため、回想法に使われる道具も昭和30年代に近い時代のものばかりが取り上げられ、そこに将来の高齢者（例えば筆者が高齢者となるのは約30年後）のために、今まさに使われているような道具を集めようという声は聞かれない。

その一方で、博物館の本来の活動では、小学生の学習支援を目的とした「昔の道具展」に見られるように、各博物館では平成に入った頃の道具も収蔵し活用されている。そういう意味では、将来にわたって回想法を実施していくためにも、現在進行形で使

われている道具の収集にも努めるべきだという論調も必要ではないかと筆者は考える。

また、博物館と回想法の関係を論じる中では、多くの場合がその目的を認知症予防と捉えており、本家である北名古屋市における回想法をきっかけとした地域活動を始めるためのサポートとしての取り組みと、認知症予防を目的とする博物館がかかわる回想法との間に、目的に対する認識のズレが生じている点も見逃すことができない。

博物館がかかわる回想法にはこういった課題もあるが、一方で大きな可能性も秘めている。六車が提唱する「介護民俗学」で示された視点もその一つである。

介護民俗学では、介護施設において行う民俗学の手法による聞き書きが、施設の利用者と職員の介護される側と介護する側という関係に固定されてしまうところを、語る側と聞く側という新しい関係を生み出すことになり、それまで上位に立っていた介護する側の若い人が今度は話を聞かせてもらうことで、話をするお年寄りが上位に立つという立場の逆転が生まれるとしている<sup>13</sup>。

博物館も一方的に来館者に対して教える立場に立っているが、思い出を語る場を提供することで、博物館が来館者に何かを教えるということではなく、来館者が同伴者に何かを伝えるという新しい関係を築ききっかけにできるのではないかと考える。

もう一つの視点は、加藤が行った東日本大震災後の博物館的な活動として老人ホームで高齢者に対して民具の聞き書きを行っていた際に、施設の方から、高齢者が自分の人生に関心を持ってもらうことは、誇りを取り戻すことだと語られたことが紹介されている<sup>14</sup>。筆者はそれを回想法の手法を用いることで、その人を主役にすることができるということだと解釈をした。

これらの事例から博物館と回想法の関係を改めて考えると、回想法の視点を取り入れた博物館活動を行うことで、認知症予防ではなく、誰もが主人公となって懐かしい思い出を語ることでできる機会を創出することができるのではないかと考える。

こういった視点を踏まえ、博物館がかかわる回想法の現状を整理し、それらの特徴を生かし、博物館に来館する誰もが主人公となることができるような活動の可能性を探ることが本稿の目的である。

## 第2章 北名古屋市における地域回想法

### 第1節 地域回想法の取り組み

まず、博物館と回想法との関わりにおける先行事

例として、北名古屋市での事例を確認したい。北名古屋市での回想法の取り組みは「地域回想法」と名付けられ、福祉部門を中心に北名古屋市博との連携で行われているのが特徴である。

地域回想法では、グループ回想法によって、介護予防を視野に入れながら、回想法を楽しむだけでなく、回想法を通じて作られた参加者同士の絆を原動力として、そこから社会参加に展開していくよう導いていく仕掛けとして「回想法スクール」を設定している<sup>15</sup>。全8回のスクールを終えると、回想法スクール卒業生の継続的な活動組織である「いきいき隊」という組織へ移行し、一緒にグループ回想法を行った仲間との自主活動を行うとともに、それまでの卒業生と一緒に進める活動や、子どもたちとの交流を行う活動など、様々な活動で活躍する機会が設けられているというのが特徴となっている<sup>16</sup>。

こういった北名古屋市における地域回想法の中心をなす施設は、北名古屋市回想法センターで、市の福祉部門との協働事業としてNPO法人がその運営を行っている<sup>17</sup>。室内は、片面に教室を再現した黒板が設置され（写真1）、もう半分は皆で丸くなって話し合いができるようになっており（写真2）、奥にある倉庫には多くの懐かしい道具が収蔵され、いつでも自由に触れることができるようになっている（写真3）。

基本的にこれらの道具は北名古屋市博の資料で、それをNPO法人で借りている扱いになっている。また、収蔵庫の奥には貸出用の回想法キットが積んであり、これらの貸し出しもNPO法人が窓口となって行っている。

### 第2節 北名古屋市歴史民俗資料館との関係

回想法センターの活動に協力する形を取っているのが北名古屋市博である。北名古屋市博では、昭和時代を伝えるさまざまな日用品や電化製品などが捨てられていく現状を踏まえ、昭和時代の資料の大切さを伝え残していくことが急務と考え、館の方針としてこれらの資料の収集活動を行っていた<sup>18</sup>。そういった活動が基となり、地域回想法との連携がうまく行えたともいえる。

北名古屋市博は現在、来館することで実際に回想法を体験する場としても機能している。展示室全体が昭和30年代に特化した展示となっており、何か新しいことを学ぶ場というよりも、知っていることを懐かしみに行く場として機能している全国でも珍しい博物館である。

エレベーターを降りると、目の前に3軒の店舗が

再現されている（写真4）。再現度の高さにいきなり驚かされるとともに昭和30年代の世界に引き込まれる。展示室を進むと、昭和30年代のお茶の間の再現（写真5）、それ以前に建てられた住宅における昭和30年代における利用状況の再現、別の展示室には街並みの様子が再現されている。再現展示に限らず、全館どこを見ても昭和30年代の道具であふれている（写真6）。

また、「お出かけ回想法」として、高齢者施設の人たちの見学を推進しているが、高齢者にとって懐かしいモノがあふれていて、自然に笑顔になってしまうのもうなずける。

北名古屋市中での取り組み事例からわかることは、あくまでも地域回想法の主体は福祉部門にあるということである。その活動をより充実したものとするために博物館との連携がしっかりとできていて、博物館活動もまた地域回想法の一部を担っている状況にある。そして、北名古屋市博の展示を通して懐かしい思い出がよみがえるとともに、そういったことを語りだしたくなる装置として展示全体が機能しているという点は、他館には見られない最大の特徴といえる。

### 第3章 博物館がかかわる回想法

これまで北名古屋市中での事例を見てきたが、他の博物館で行っている回想法と関係のある活動についても確認してみたい。

博物館が回想法にどういった形でかかわるかという視点で整理すると、①福祉施設などで行う活動に対し、博物館資料を貸し出すもの、②博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法、③回想法の視点を提示した博物館展示の3つに分類することができる。これらのうち①と②はグループ回想法に博物館がかかわる事例であり、③は回想法を展示に反映させた事例といえる。ここではまず、①と②のグループ回想法に博物館がかかわっている具体的な事例を確認したい。

#### 第1節 福祉施設などで行う活動に対し、博物館資料を貸し出す事例

まずは、回想法のために貸出キットを用意している事例から確認したい。第2章で取り上げた北名古屋市中では、地域回想法センターで貸出用の「回想法キット」として「スターターキット」と「テーマ別キット」を用意している<sup>19</sup>。また、北名古屋市中にない回想法に積極的に取り組んでいる氷見市立博物館でも、介護福祉施設などに民具セットの貸し出しを

行っている<sup>20</sup>。

次に、回想法用に介護福祉施設などに貸し出すだけでなく、同じキットを小学校の学習対応としても貸し出ししている事例を確認したい。

愛媛県立歴史文化博物館では、「れきハコ」という貸出教材キットを用意しており、その中の1つに「昔のくらしパックー衣食住の道具」というものが存在する<sup>21</sup>。宮崎県総合博物館では「昔の道具貸出キット（民俗）」というものを用意している<sup>22</sup>。滋賀県の東近江市でも、東近江市能登川博物館で「回想法セット」の貸し出しを行っている<sup>23</sup>。

このように、回想法のために貸出キットを用意している事例と、小学校での学習と回想法とのどちらにも対応できる貸出キットを用意している事例とが存在することが確認できる。回想法に役立つ道具がそのまま小学校で学ぶ「昔の道具調べ」の学習で使用する道具と重なるのは納得のいくものであり、回想法のためだけに貸出キットを用意するよりも学校での利用も想定した方が汎用性は高まる。

グループ回想法を行おうという時には、実物資料があることで高齢者の記憶に直接働きかけることができることから、博物館で所蔵する資料を借りられることはグループ回想法を行おうとしている福祉施設などにとって、高い効果を得ることに繋がることは間違いない。

ただし、これらの活動においてグループ回想法を行う主体は、福祉施設などである。そのため、グループ回想法を行える人材が福祉施設などにいることが前提となっている。そういう面でのハードルがあることから、北名古屋市中回想法センターではグループ回想法のやり方や貸出キットの使い方をレクチャーしたDVDを「スターターキット」の中に同梱するといった配慮も見られる<sup>24</sup>。

#### 第2節 博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法

博物館の活動として、博物館職員が博物館資料を用いて回想法の実践を行う事例が見られる。これには大きく2つのパターンがある。一つは博物館職員が博物館資料を持って福祉施設などを訪問して実施するグループ回想法、もう一つは福祉施設などから高齢者が博物館を訪問して実施するグループ回想法である。後者をもう少し細かく見ると、博物館の中でも会議室などで行われる場合と、展示室で行われる場合とがある。

いずれにしても博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法は、福祉施設などにグループ回想法の実

践を行える人材がいけない場合に大きな効果を生むと考えられる。もっとも回想法に認知症予防の効果があるということを福祉施設などの側で認識していなければ、こういったメニューを用意してもなかなか利用には繋がらないので、回想法の効果に対する普及活動は別に必要となるだろう。

実施場所の違いは、高齢者が外出できる状況にあるのかといったことや、より多くの資料に触れられるか、または再現展示などを用いることでより効果のある活動ができるかといった違いと考えられる。こういったことも意識したうえで、少し具体的な事例を確認しておきたい。

氷見市立博物館では、移築復元された明治中期の民家内で、明治期から昭和30年代頃まで使われていた民具を用いた、「博物館見学&思い出語りの会」を行っている<sup>25</sup>。また、職員自らが地域の高齢者のもとに出て行き実践する出張回想法や介護施設でのグループ回想法も行っている<sup>26</sup>。

和歌山立博物館では、高齢者福祉施設から来館してもらい、民俗展示としての復元民家の見学と合わせて、別室にて生活道具に触れられるようなコーナーを作っている<sup>27 28</sup>。

調布市立博物館では、北名古屋市へ視察に行った議会からの本会議における質問がきっかけとなって、地域回想法の取り組みが始まっており<sup>29</sup>、博物館の民俗担当学芸員が、小学校へ出張授業用の道具セットを利用する形で、高齢者施設等へ足を運んで回想法を実践している<sup>30</sup>。

### 第3節 事業としての回想法と展示活動との関係

いくつかの事例を見てきたが、博物館職員が博物館資料を用いてグループ回想法を行い、認知症予防に繋げるこれらの活動を指して地域回想法とか博物館で回想法に取り組んでいるというケースが多いように感じる。時には博物館と福祉部門との連携事業として「博福連携」という言葉で語られることもある<sup>31</sup>。

博物館が主体となって福祉的な活動を行うこと自体は悪くないし、それによって博物館の存在価値が高められていることも事実である。

ただ、これらの多くは博物館の事業としてその活動に取り組んでおり、展示活動が回想法に対応しているというわけではないので、回想法に取り組んでいるという情報を基に博物館を訪れて展示を見ても、民俗分野での再現展示や、歴史分野で家電製品が導入された頃の話をしている状況であり、通常の展示の流れの中に回想法にも用いることができる道具が

組み込まれているだけで、展示に対して回想法を行うための特別な配慮がなされているようにはほとんど見えない。

そういう意味では、多くの博物館では博物館の事業として回想法を取り入れた活動は行っている、それらの取り組みを展示に活かすところまでは至っていないのが現状といえる。

## 第4章 回想法の視点を提示した博物館の展示

これまで見てきた事例は、博物館資料を用いてグループ回想法に取り組んでいる事例であったが、こういった活動をさらに展開し、展示を通して懐かしい思い出を積極的に思い出してもらうよう働きかけられている博物館も存在する。この事例にも大きく2つのパターンがある。一つは常設展示を用いた事例、もう一つは小学生の学習支援を目的とした企画展示「昔の道具展」の中でそういった視点を提示した事例である。本章ではそれらの事例について確認したい。

### 第1節 常設展示を用いた事例

まずは常設展示に一工夫加えることで、回想法を実践してもらうことを意図していることが明白な事例から確認してみたい。

・益田市立歴史民俗資料館（平成31年4月1日より休館中）

常設展示室には、「若返りの間」という展示室があり、入口には「昔の生活用具を見て人とお話をする」と脳が活性化されます。医学的には『回想法』と言われます。皆様の健康増進に役立てば幸いです。」と書かれた掲示がされていた。

展示品は明治から昭和初期までの民具で、家電製品はない。畳を敷いてちゃぶ台が置かれてはいるが、回想を促すために手の込んだ仕掛けをしているわけではなく、入室記念証というものを作っている程度の活動状況である<sup>32</sup>。

・東郷町郷土資料館

スポーツ施設や図書館、地域包括支援センターなどの機能を有する複合施設の中にあり、郷土資料館と昔体験館という2つのスペースを有する。

展示室に入るとすぐ「教えてください昔のこと…聴かせてくださいあなたの思い出…」と大きく書かれている（写真7）ほか、民具などの横には質問がイラストとともに掲示されている。また、小学生などの学習でも対話を促すようなパネルがあるなどの工夫が見られる。

展示物は主に電化以前の道具で、展示室中央には

住宅内部の再現があり、居間と土間が再現されている。

昔体験館は、昭和30年代の学校の教室が再現されており、回想法教室も行われるなど、全体として回想法を意識した展示がなされている。

・北区飛鳥山博物館「＜回想のための＞テーマ展示 オボエテマスカ？－懐かしの暮らしと道具－」

北区飛鳥山博物館では、2012年からほぼ毎年、「＜回想のための＞テーマ展示 オボエテマスカ？－懐かしの暮らしと道具－」という回想法のための展示を行っている<sup>33</sup>。

この展示は、常設展示室内にある大正期の住宅の建物とその内部に、戦前・戦後の道具を用いて生活の様子を再現しているのだが、それらの展示物の横に思い出を語ることに繋がる質問パネルを設置して回想を促す展示を行っている<sup>34</sup>（写真8）。

回想は道具があればできるような気もするが、うまく誘導していくことで、より豊かな回想が行えることを見事に体現する展示であり、パネルの設置方法や質問の仕方など、回想を促す展示のあり方として先進的な取り組みといえる。

ここでは3つの事例を見てきたが、これらの事例では、回想法という手法を示すことや、懐かしい思い出を語ることを促すという方法があるほか、グループ回想法などで行われる質問を掲示することで、展示そのものを通して回想を促すという方法が存在することがわかる。

## 第2節 昔の道具展で回想法の視点を提示している事例

回想法を主たる目的としていない展示でも、回想を促すような事例は見受けられる。特に、懐かしい思い出に繋がりやすい道具を展示している小学生の学習支援を目的とした「昔の道具展」において、確認される。ここではあいさつ文で回想法的な視点が示されている事例と、懐かしい思い出の共有を図っている事例とを確認したい。

・八千代市立郷土博物館 令和元年度「暮らしのうつりかわり展 ～昭和と平成の暮らし～」(2019年12月14日～2020年2月16日)

あいさつ文には、「小学校の3年生は、『昔の道具』について学んでいますが、実物を見ながら理解を深めていただくことを目的に開催しています。また、実際に昭和の暮らしを体験してきた方々には、昔を懐かしみ、活力を取り戻していただく機会となることを期待しております。」<sup>35</sup>とある。

・群馬県立歴史博物館 群馬県立歴史博物館第16回

テーマ展示「昭和の暮らしをのぞいてみよう」(2020年10月3日～2021年2月7日)

あいさつ文には、「小学生たちにはくらしの変化を考えるよい機会となり、昭和を知る世代の方たちには懐かしく思い出を語り合う機会となれば幸いです。」<sup>36</sup>とある。

・豊田市郷土資料館 豊田市郷土資料館企画展「くらしのうつりかわりー『食べものと道具』」(2019年12月14日～2020年3月8日)

あいさつ文には「今回の展示をご覧になり、『同じような道具を使っていた』という記憶やそれにまつわる思い出がよみがえってくる方もいらっしゃることでしょう。こうした記憶や思い出を郷土資料館にお寄せいただければ幸いです。」<sup>37</sup>とある。

・新潟市歴史博物館 「みなとびあむかしのくらし展『にいがたの昭和』」(2020年9月12日～11月3日)

あいさつ文には、「昭和という時代を題材に、当展が世代を超えた歴史の語らいの場になることを期待しています」<sup>38</sup>とある。また、展示の最後にあった「私の昭和」というコーナーは、来館者が記入した思い出を掲出するコーナーとなっていて、自身の思い出を振り返るだけでなく、その思い出を共有するツールとなっていた（写真9）。

・相模原市立博物館 「学習資料展 ちょっと昔のくらし13 ～ジイジ・バアバ、パパ・ママの子ども時代～」(2017年11月14日～2018年2月25日)、「まなべる くらべる 学習資料展 ～便利になった道具とふるさといろはかるたで見ると移り変わり～」(2018年11月1日～2019年2月24日)、「学習資料展 ちょっと昔のくらし ～第18回東京オリンピックの頃～」(2019年11月1日～2020年2月24日)、「学習資料展 道具が変えるわたしのくらし～過去から未来へ向かう記憶～」(2020年12月5日～2021年1月31日)

毎年実施されている学習資料展の最後には「思い出掲示板」というコーナーがあり、自由記述のアンケートがそのまま掲出されており、お父さんお母さん世代をはじめとする来館者の声に直接触れることができる機会を創出していた。

これらは回想法的な視点と関わる事例の一部ではあるが、あいさつ文において回想を促すような記述や対話の機会創出を促すような記述があるほか、記憶や思い出を博物館に寄せてほしいと呼びかける事例も見られる。

さらに呼びかけるだけでなく、実際に懐かしい思い出を記入し、掲出する場を設けている事例も見ら

れる。思い出を掲出する展示においては、他の来館者の思い出に触れることができるうえ、それらの思い出に触れることで関連する思い出がよみがえるといった状況も生じるなど、掲出された思い出を通した対話の機会となっていることも確認される。

昔の道具展では、一義的には小学生の学習支援を意図した展示となっているが、一方で、見学者には小学生と一緒に来館する保護者や小学生から見た祖父母世代なども存在しており、それらの人たちにとって、展示されている資料は実際に使用したことがある懐かしい道具であり、思い出を語りたくなる道具であることは間違いない。そういった人に向けてあいさつ文で語りかけるほか、思い出掲示板を設置することで、展示されている資料に関連する思い出を語ってもらうシステムができあがっている。これらの事例は回想法を目的とした展示ではないものの、懐かしい思い出を語るという点では、回想法を意識した展示と同列に位置するものと捉えることができる。

### 第3節 展示活動に見る回想法との関係

本章では回想法の視点を提示した博物館の展示事例を確認してきたが、これらの事例からは、グループ回想法とは異なり、発話を引き出すにあたりリーダーなどの人による介入が存在しないという特徴が見て取れる。

常設展示を用いた事例からは、回想法の効能を端的に示すことや思い出を聞かせてほしいと語りかけるとともに、展示資料に対して質問を設けるなどの工夫をすることで、展示を通して認知症予防に繋がっていることがわかる。

ただしこれらの事例にも課題はある。特に大きな課題は、グループ回想法などと比べると、認知症予防に繋がる継続的なプログラムとしての提供ができないことである。認知症予防としては、一定の間隔を開けながらも継続的に取り組むことでその効果が次第に現れてくるものであるが、博物館の展示を見学するのは来館者の都合によるので、何度も継続的に見てもらうことは難しいし、その都度新しいテーマを提示することも難しい。そういう意味では認知症予防にどれくらい効果があるのかはわかりにくい面があるのも事実である。

それでも回想法に取り組むきっかけは提示できているし、益田市立歴史民俗資料館ではリピーターも多いという話であったので、懐かしい思い出を語る場所が提供されている意味も大いにあると考える。

また、認知症予防という視点を展示に反映させる

ということ自体は、従来の展示には見られない手法であり、これまでの一方的に教えられる立場にあった来館者が、展示の世界に入り込むという新たな立ち位置を与えることにも繋がっている。

昔の道具展の事例では、高齢者に限らず、比較的若い保護者世代に対しても懐かしい思い出を語るための工夫があいさつ文や思い出掲示板を通してなされている。懐かしい思い出を語りだしたくなることは高齢者に限ったことでなく、適切な道具やきっかけを示すことができれば、若い世代の人でも懐かしい思い出がよみがえってくるのがこれらの事例からも見て取れる。

博物館で所蔵する資料が回想法と相性が良いことは紛れもない事実である。それらを用いた認知症予防のためのグループ回想法への協力や参入という前章での活動は、あくまでも回想法に博物館が寄っていた結果と考えられるが、本章で取り上げた事例は、グループ回想法を取り仕切るリーダーなどの人を介しない形で回想法に取り組んでもらうという展示のあり方を示したもので、展示の中に回想法の手法を取り入るという新たな展開を示す活動となっている。

さらに吉田憲司が提唱するフォーラムとしての博物館という視点で考えると<sup>39</sup>、現代資料を用いた展示に回想法の視点を取り入れることで、展示資料を通した対話の機会を生み出すことに繋がっていると考えられる。資料を通した対話の機会を生み出すことは、これまで一方的に教える立場にあった展示のあり方に大きな変化をもたらす。しかも、これまで見る側だった来館者が、回想法の手法を通して展示される側に近づいてくことになる。自分が知っている道具が展示されていて、それに関する思い出を語るとは、展示を見ていた人が展示する側のような立ち位置となって、ほかの来館者などに対して語りかける存在にもなりうる。回想法の手法を展示に応用することは、まさに対話の機会の創出や展示における立場の転換を図る可能性を秘めているといえよう。

## 第5章 回想法の手法を用いた展示への応用

### 第1節 博物館活動と回想法のまとめ

これまで見てきた博物館における回想法との関わりを改めて確認すると、福祉施設などにおける回想法への支援から、博物館職員による回想法の実践を経て、展示を通した回想法の実践、さらに昔の道具展などでも懐かしい思い出を語る取り組みなど、懐かしい思い出をめぐる博物館活動との関係は幅広いものとなっていることがわかる。これらの事例と今

後の応用に向けた視点も含めて整理したものが表である。

北名古屋市の地域回想法では、認知症予防を目的とはしていないが、多くの博物館で行われている回想法の取り組みは認知症予防が目的となっている。ただ対象はともに高齢者となっている。それぞれ実施主体や実施場所、実施方法などが福祉の場面から博物館の場面へと移るように表は作成したが、ここに昔の道具展の取り組みも含めてその活動を再考してみたい。

前章で見てきたように、回想法の手法を展示に取り入れる事例がある他、昔の道具展でも回想法的な視点が示されている状況がある。昔の道具展では保護者世代が懐かしい思い出を記入しているケースも良くあり、回想法と聞くと一見高齢者向けの取り組みに見えるが、懐かしい思い出を語るためのツールとして捉え直すと、何も高齢者向けの取り組みではないことがわかる。

例えば、筆者が参加した回想法の研修においても、まず参加者同士でグループを作り、グループ回想法の参加者となって体験してみるという時間が存在した。研修の参加者はグループ回想法を進行する立場を目指す人たちの集まりであるから、参加者はもちろん高齢者ではない。それでもグループ回想法を体験してみると、懐かしい思い出を語ることが何も高齢者に限ったことではなく、若い人であっても話しやすいテーマ設定をうまくできれば、参加者同士で話が盛り上がるということを体感した<sup>40</sup>。

筆者が勤務する福生市郷土資料室（以下「福生市博」という。）で2020年8月に実施した実施した博物館実習においても、回想法の取り組みについて説明をする際に、懐かしい思い出を実習生同士で話してもらう機会を作ろうと、あらかじめいくつかの質問をくじ引きのようにして用意し、引かれた内容に基づいて皆で懐かしい思い出を語るということをゲーム感覚で実施した<sup>41</sup>。回想法を懐かしい思い出を語るためのツールとして捉えれば、20代であっても子どものころの懐かしい思い出などは共有できるのである。

このように、回想法で用いる質問自体は認知症予防に役立つだけでなく、世代に関わらず懐かしい思い出を共有するためのツールとして活用できることがわかる。また、様々な世代の人が交わりながら回想法をツールとした対話を行うと、世代ごとの特色が出るなどして、世代を超えた対話の機会へも繋がっていく。

そこで、回想法を懐かしい思い出を語るためのツ

ールと捉え直し、それを展示の中に应用することで、認知症予防を目的としない、対話の機会を生み出すことを目的とした展示活動ができるのではないかと考えたものが、表の右側の列にある回想法の手法を用いた博物館展示である。

回想法の手法を用いた博物館展示では認知症予防を目的としないものの、回想法においてきっかけとして提示される懐かしい思い出を語りたくなるような質問を、展示資料の近くに掲出するなどの方法で実施することを想定している。この時、来館者が心の中で懐かしい思い出を思い出だけでなく、その思い出を何らかの形で表出できる仕組みがあった方が、他の来館者との対話の機会の創出に繋がると考える。

## 第2節 回想法の応用事例

具体的な応用方法としては、シールを貼ってもらうタイプの質問を設置するとか、付箋に思い出を書いてもらって自由に張り出してもらうとか、思い出掲示板の設置などが考えられる。これらの具体的な活動については、筆者が勤務する福生市博において、シールを貼ってもらう質問の設置として実践を行ってみたところである（写真10）この取り組みについては『福生市郷土資料室研究紀要』第2号で報告しているので<sup>42</sup>、詳細についてはそちらに譲るが、ここではそこで得られた課題や可能性について触れておきたい。

課題としては、シールを貼ることに対しては心理的ハードルが低い一方、途中から実施した記入式の思い出の掲出については心理的ハードルが高いことが見えてきた。思い出の掲出への記入が少ない状況は、展示される側に回りたくないという心理が働いていることが考えられる。書いたものを掲示しますとうたっているのに、語りたいたいという気持ちと、その気持ちを見られたくはないという心理が裏表となっているのではないかと考える。

思い出の掲出では、展示を見る人が展示をされる側となることから、展示する人、される人、それを見る人という関係の転換にも繋がると考えたが、この関係を転換するにはもう一工夫必要だということが見えてきたところである。

ここで考えなければいけないことは、「展示されること」が「動物園の折の中に入れられる＝見世物になる」と捉えられ、展示されることに嫌悪感が生じているのかもしれないということである。懐かしい思い出を語りだしたくなったとして、家族や知り合いとその思い出を共有するのはいいとしても、展示



室に自分の思い出を掲出することで、自分が見世物になるのは嫌だと感じる。この心理を解くための工夫も考えなければならない。

心理的な段階を考察すると、①こんなことあったなと自分の心で思う、②隣にいる人に思わず話す、③アンケートなどに書く（公表されない前提で館の人には伝えたい）、④共有を目的として用紙に思い出を書くといった段階があるのかもしれない。シールを貼るという調査方法は、②と③の間くらいに位置する絶妙な立ち位置で思い出を表明する方法だった可能性がある。

今回の実践を通して得られた回想法の手法を用いた博物館展示の持つ可能性としては、福生市博で従来から行っていた小学生クイズとシールによる調査の場所が近接していたことから、小学生とその親世代の参加が多く見られた<sup>43</sup>。小学生やその親世代の参加があるということは、世代を超えた会話を生み出すことに繋がっていると同時に、さらに上の世代が参加することで、多様な世代での対話を生み出す可能性がある。

今回の実践を通して、回想法の手法を用いた博物館展示が来館者にとって常設で展示している民俗資料にこれまで以上の関心を持ってもらうことに繋がる可能性を確認できた。常設展示はいつ来ても変わらないというイメージもあり、なかなか目を向けてもらうことが難しい面があるが、新たな視点を提示することで、資料に関心を持ってもらうことや、資料を通して学ぶという従来の博物館活動から、展示されている自身も使用したことのある道具を通して世代を超えた会話を生み出す場へと博物館活動を転換させることができる可能性をも感じることができた。

## まとめと今後の課題

本稿では、博物館における回想法との関わりについて整理するとともに、回想法を懐かしい思い出を語るためのツールとして捉え直し、その視点を展示に反映することで、世代を超えた対話の機会を創出することができるのではないかということについて考察を行ってきた。

さらに、回想法の持つ可能性として、博物館における展示のあり方を転換させることに繋がるという視点は、フォーラムとしての博物館の考え方にも近いものがあり、そういった視点で博物館の展示を見直すことで、博物館展示の持つ可能性を捉え直そうと試みたものである。

実践に移すにはまだ技術的な工夫が必要なことは

これまでの福生市博での活動からも明らかであるが、回想法の手法を展示に反映させることで、多世代にわたる来館者一人一人が主人公となって思い出を語ることでできるツールとして機能させることは十分にできると考える。

これまで多くの博物館では回想法を認知症予防として捉え取り組んできたところであるが、今後、懐かしい思い出を語るツールとして捉え直し、展示に懐かしい思い出を語りだすきっかけとなる質問を提示するなど、回想法の手法を反映していくことで、博物館と来館者の関係を転換させ、博物館が自分自身を語るために必要な施設となり、懐かしい思い出を語ることで他の人と繋がるための施設となることが期待される場所である。

<sup>1</sup> 梅本充子「回想法とは」NP0 法人シルバー総合研究所編『地域回想法ハンドブック 地域で実践する介護予防プログラム』河出書房新社、2007 年、p. 29

<sup>2</sup> 同前 pp. 29-30

<sup>3</sup> 同前 p. 30

<sup>4</sup> 2018 年 5 月 19 日、20 日に北名古屋市健康ドーム開催された「健康高齢者との地域回想法基礎研修」に筆者が参加する中で学んだものである。

<sup>5</sup> 来島修二「地域回想法とは」『地域回想法ハンドブック 地域で実践する介護予防プログラム』河出書房新社、2007 年、p. 51

<sup>6</sup> 日本民具学会第 43 回大会公開シンポジウムの趣旨文では、『回想法』とは、昔の体験を思い出し、互いに語り合うことで脳を活性化する非薬物療法である。さらに、昔懐かしい民具を見て、触れて、互いに語り合うことによって、病院や施設などの介護ケア現場だけでなく、認知症予防のための地域のより多くの人びとに広げる試みが『地域回想法』である」（日本民具学会第 43 回大会実行委員会「日本民具学会第 43 回大会公開シンポジウム『民具の活用と地域回想法』の趣旨」日本民具学会編『民具研究』第 160 号、日本民具学会、2020 年、p. 27）と述べており、やはり認知症予防が主目的と捉えられていることがわかる。

<sup>7</sup> 青木俊也「戦後生活を展示する意味を考える」『松戸市立博物館紀要』第 23 号、松戸市立博物館、2016 年、pp. 9-11

<sup>8</sup> 市橋芳則「地域回想法・博物館資源の活用」『地域回想法ハンドブック 地域で実践する介護予防プログラム』河出書房新社、2007 年、pp. 225-266 など。

<sup>9</sup> 小谷超「博物館が市民と連携して実施する『地域回想法』について」氷見市立博物館編『特別展「思い出をつむぐ くらしを知る」ー博物館と地域回想法ー』氷見市立博物館、2017 年、pp. 42-48 など。

<sup>10</sup> 岩崎竹彦『福祉のための民俗学 回想法のすすめ』慶友社、2008 年、pp. 23-64 など。

<sup>11</sup> 六車由実『驚きの介護民俗学』医学書院、2012 年

<sup>12</sup> 加藤幸治『復興キュレーション 語りのオーナーシップで作り伝える “くじらまち”』社会評論社、2017 年

<sup>13</sup> 六車由実『介護民俗学へようこそ！「すまいるほーむ」の物語』新潮社、2015 年、p. 13

<sup>14</sup> 加藤幸治前掲書 pp. 100-103

<sup>15</sup> 来島修志前掲書 p. 51、p. 59

<sup>16</sup> 小島恵美「地域回想法の伸展と町づくり」『地域回想法ハンドブック 地域で実践する介護予防

プログラム』河出書房新社、2007 年、pp. 141-166

<sup>17</sup> 職員の方の話によると、回想法センターは市域の外れの方にあるとのことで、現在回想法スクールを行う際は市内のほかの公共施設を使って行ったりもしているそうで、ここはあくまでも回想法の拠点の一つとして機能していることになる。

<sup>18</sup> 市橋芳則前掲書 p. 231

<sup>19</sup> 同前 p. 242

<sup>20</sup> 小谷超前掲書 pp. 44-45

<sup>21</sup> 愛媛県立歴史文化博物館ホームページ「れきハコ」

<https://www.i-rekihaku.jp/school/rekihako/> (2021 年 6 月 29 日閲覧)

<sup>22</sup> 宮崎県総合博物館ホームページ「昔の道具貸出キット」

[https://www.miyazaki-archive.jp/museum/riyo/borrowed/kashidashi\\_kit/](https://www.miyazaki-archive.jp/museum/riyo/borrowed/kashidashi_kit/) (2021 年 6 月 29 日閲覧)

<sup>23</sup> 東近江市能登川博物館ホームページ「回想法セット貸出」

<https://e-omi-muse.com/notohaku/kaiso.html> (2021 年 6 月 29 日閲覧)

<sup>24</sup> 市橋芳則前掲書 p. 242。なお同書では、同梱品はビデオテープとなっているが、現在では DVD となっていることを北名古屋市のホームページ「回想法キットの貸出し」

<https://www.city.kitanagoya.lg.jp/fukushi/3000079.php> (2021 年 6 月 29 日閲覧) で確認したので、本文では DVD と表記した。

<sup>25</sup> 小谷超前掲書 pp. 43-44

<sup>26</sup> 同前 p. 45

<sup>27</sup> 和歌山市立博物館ホームページ「和歌山市立博物館回想法プログラム」

<http://www.wakayama-city-museum.jp/document/kaisoho.pdf> (2021 年 6 月 29 日閲覧)

<sup>28</sup> なおこの別室は、自由に見学できる展示室とは異なり、一般の見学者が普通に見学に行っても見ることはできない。

<sup>29</sup> 調布市では 2014 年から 17 年にかけて 3 名の議員から回想法に関して一般質問がなされている（調布市議会会議録簡易検索ホームページ

<http://chofucity.gijiroku.com/voices/index2.html> での「回想法」という語での検索結果 (2021 年 7 月 14 日閲覧)）。これは 2014 年に議会で行った視察を踏まえた質問で、質問先は全て調布市郷土博物館であることから、視察に行った議員も地域回想法を博物館の活動と理解したようである。

<sup>30</sup> 調布市郷土資料館学芸員への聞き取り (2018 年 2 月 18 日)

<sup>31</sup> 小山博「博福連携事業『博物館で思い出を語ろ

う！』について ―宮崎県総合博物館の試み―  
宮崎県総合博物館編『宮崎県総合博物館研究紀要』  
第38輯、宮崎県総合博物館、2018年、p. 145や、  
市橋芳則『『博福連携』で高齢者とミュージアムを  
結ぶ ―新たなコレクションの構築と人生100年  
時代への発信―』小川義和・五月女賢司編『発信  
する博物館 接続可能な社会に向けて』ジダイ社、  
2021年、p. 195など

<sup>32</sup> 職員の方に聞いた話では、筆者が訪問した2018  
年12月8日現在、入室記念証をはじめてから日が  
経ち、もらう人は少ないそうだが、展示室自体は  
リピーターがいるほど人気とのことであった。

<sup>33</sup> 久保整企美子「一視点3― Communication―  
会話を楽しむ―」北区飛鳥山博物館編『北区飛鳥  
山博物館研究報告』第22号、2020年、p. 16

<sup>34</sup> ホウキとバケツ、雑巾の横には「小さい頃、掃  
除の手伝いをしましたか？」とか、庭先に植えら  
れた木の横には「あなたが育った家の周りには、  
どんな木が植えられていましたか？」といった質  
問も見られた。また、コーナーはじめのパネルに  
「無理に思い出そうとしたり、辛いことや悲しい  
ことを思い出すことはお避けください」「ご同伴の  
方がいらしたら、ぜひ一緒に思い出話を楽しん  
でください」と、回想法の基本を踏まえた注意書  
きも見られた。(2018年3月20日、2021年4月  
17日の2回見学した)

<sup>35</sup> 八千代市立郷土博物館 令和元年度「くらしの  
うつりかわり展 〜昭和と平成のくらし〜」あい  
さつ文

<sup>36</sup> 群馬県立歴史博物館 群馬県立歴史博物館第  
16回テーマ展示「昭和のくらしをのぞいてみよ  
う」あいさつ文

<sup>37</sup> 豊田市郷土資料館 豊田市郷土資料館企画展  
「くらしのうつりかわりー『食べものと道具』」  
あいさつ文

<sup>38</sup> 新潟市歴史博物館 「みなとびあむかしのくらし  
展『にいがたの昭和』」パンフレットあいさつ文

<sup>39</sup> フォーラムとしての博物館という語を最初に  
用いたのは、当時のブルックリンミュージアム館  
長のダンカン・キャメロン氏で、1974年に博物  
館・美術館のあり方の類型を試みたものである(吉  
田憲司「ICOM 京都大会を振り返る―成果と課題」  
公益財団法人日本博物館協会編『別冊博物館研究』  
公益財団法人日本博物館協会、2020年、p. 48)。  
日本においては国立民族学博物館の館長である吉  
田憲司によって紹介された概念で、未知なるもの  
に出会い、そこから議論が始まる場所という意味  
で、対をなす語にはテンプルとしての博物館とい  
うものがあり、こちらはすでに評価の定まった「至  
宝」を「拝みにくる」神殿のような場所という意

味である。このフォーラムとしての博物館という  
概念には、展示を通じた対話という視点と、展示  
をする側、展示される側、それを見る側という展  
示を取り巻く人々の関係性についての視点が示さ  
れている。(吉田憲司『文化の「発見」 現代人類  
学の射程』岩波書店、1999年、pp. 212-235)

<sup>40</sup> 2018年9月16日に開催された認知症の方への  
回想法基礎研修を受講した際、筆者と同年代の参  
加者と、体験として回想法に取り組んだ時の話題  
で、懐かしい遊びの中にファミコンの話題が出て  
きて盛り上がったことがある。

<sup>41</sup> この時用意した質問は、「好きだった給食メニ  
ューは?」「子どもの頃どんな音楽が流行ってまし  
たか?」「遠足はどこに行きましたか?」「オリン  
ピックの金メダル選手といえばズバリ誰?」など  
である。

<sup>42</sup> 青海伸一「常設展示における来館者参加型プロ  
ジェクトの実施について ―民俗展示コーナーの  
資料を活用した、世代を超えた対話の創出へ向け  
ての取り組み―」福生市郷土資料室編『福生市郷  
土資料室研究紀要』第2号、2021年刊行予定

<sup>43</sup> 同前

#### 参考文献一覧

- ・北名古屋市歴史民俗資料館編『博物館資料化の  
資源化―昭和日常博物館の可能性』北名古屋市  
歴史民俗資料館研究紀要1、北名古屋市歴史民  
俗資料館、2007年
- ・北名古屋市歴史民俗資料館編『地域回想法の可  
可能性―多様な導入形態と地域への効果』北名  
古屋市歴史民俗資料館研究紀要3、北名古屋市歴  
史民俗資料館、2009年
- ・北名古屋市歴史民俗資料館編『昭和のくらしに  
学ぶ―学習素材としての展示』北名古屋市歴史  
民俗資料館研究紀要4、北名古屋市歴史民俗資  
料館、2010年
- ・北名古屋市歴史民俗資料館編『昭和を探る展覧  
会の視点―紙上展覧会へようこそ』北名古屋市  
歴史民俗資料館研究紀要8、北名古屋市歴史民  
俗資料館、2014年
- ・北名古屋市歴史民俗資料館編『昭和日常博物館  
ワークショップ小論―昭和時代の日常を伝  
え・学び・アートする―』北名古屋市歴史民俗  
資料館研究紀要9、北名古屋市歴史民俗資料館、  
2015年
- ・北名古屋市歴史民俗資料館編『昭和日常博物館  
的コレクション・セレクション―昭和の生活資  
料コレクション展示の試み―』北名古屋市歴史  
民俗資料館研究紀要10、北名古屋市歴史民俗資  
料館、2016年

(表) 博物館活動と回想法まとめ

	北名古屋市における地域回想法	福祉施設などで行う活動に、博物館資料を貸し出す支援活動	博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法	回想法の視点を提示した展示	回想法的な視点が提示されている「昔の道具展」	回想法の手法を用いた博物館展示
目的	地域で活躍する人材の育成	認知症予防	認知症予防	認知症予防	小学3年生向け 昔の道具調べ対応	世代を超えた対話の機会の創出
実施主体	福祉部門	福祉部門	博物館	博物館	博物館	博物館
実施場所	回想法センターなど	老人ホームや回想法センターなど	老人ホームへの出張や会議室など	展示室	展示室	展示室
形態	グループワーク	グループワーク	グループワーク	展示	展示	展示
きっかけの提示	リーダーによる話題提供や道具の提示	リーダーによる話題提供や道具の提示	リーダーによる話題提供や道具の提示	回想法の紹介文、回想を促す質問	あいさつ文	思い出を語りたくなるような質問の設置、アンケート形式での調査の導入など
発話の聞き手	他の参加者やリーダー、コ・リーダー	他の参加者やリーダーやコ・リーダー	他の参加者や学芸員、担当者	一緒に来館した人や職員など	一緒に来館した家族など	来館者どおし、職員、掲示によるなら次の来館者全世代（小学生等も含む）
発話する人・対象	高齢者	高齢者	高齢者	高齢者	高齢者、保護者世代	
課題		実物資料を用意するのが困難。 リーダーなどを行える人材の確保が難しい。	福祉部門との連携がうまくいっていない事例が見られる。	回想の成果を図ることが困難。 (益田市立歴史民俗資料館の入室記念証の取り組みは良い)	回想は一回性のもので、継続的な利用に繋がらない。	質問の設定に工夫が必要、記入式のアンケートは心理的ハードルがある。
博物館としての関わり方	資料の貸し出し、展示室におけるお出かけ回想法など	博物館による資料の貸し出し	博物館事業として出張回想法や来館しての回想法対応	回想を促す展示を行う	回想を促すあいさつ文や回想した内容を共有できる掲示を行う	常設展示の中に、思い出を語りたくなるきっかけを提示する
本論で触れた具体的な博物館例	北名古屋市歴史民俗資料館	氷見市立博物館 愛媛県立歴史文化博物館 宮崎県総合博物館 東近江市能登川博物館	氷見市立博物館 和歌山市立博物館 調布市立博物館	益田市立歴史民俗資料館 東郷町郷土資料館 北区飛鳥山博物館	八千代市立郷土博物館 群馬県立歴史博物館 豊田市郷土資料館 新潟市歴史博物館 相模原市立博物館	福生市郷土資料室



(写真1) 北名古屋市回想法センターの様子①



(写真2) 北名古屋市回想法センターの様子②



(写真3) 北名古屋市回想法センターの様子③



(写真4) 北名古屋市博の昭和30年代の再現展示①





(写真5) 北名古屋市博の昭和30年代の再現展示②



(写真8) 北区飛鳥山博物館「＜回想のための＞テーマ展示」の展示風景



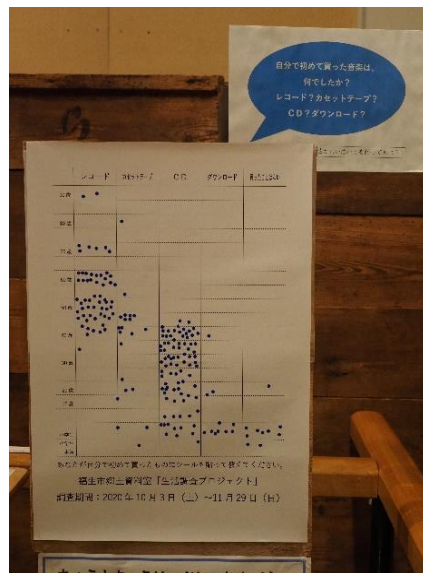
(写真6) 北名古屋市博の昭和30年代の道具の展示



(写真9) 新潟市歴史博物館「わたしの昭和」の様子



(写真7) 東郷町郷土資料館の展示室の様子



(写真10) 福生市博の来館者参加型展示の様子

## Organization and Application of Reminiscence Therapy in Regional Museums

Shinichi SEIGAI

One of the recent initiatives engaged in by museums is an approach called “reminiscence therapy,” in which nostalgic memories are talked while leveraging tools that were actually used in the past. This reminiscence therapy is one that is advocated by Robert N. Butler who posits that through talking about nostalgic memories, the brain is stimulated, which helps prevent dementia. Museums collect and exhibit tools related to daily life, and the basic idea is to use these tools possessed by the museum to provide the elderly with an opportunity to talk about nostalgic memories and help prevent dementia.

In the current study, I will begin by confirming what is happening in Kitanagoya City, which was the first city to conduct activities using reminiscence therapy. Subsequently, I will divide cases into those in which the museum loans out the necessary tools for reminiscence therapy, those in which the museum staff makes use of the museum materials, and those in which the museum presents exhibits that adopt the viewpoint of reminiscence therapy, and then present the characteristics and challenges of each. In addition to presenting the current state of the adoption of reminiscence therapy in museums, the application of these cases to exhibitions using this method will be examined.

The perspective that can be gained through these cases is that the questions used in reminiscence therapy can be leveraged as a tool for sharing nostalgic memories regardless of one’s age bracket. Therefore, this paper parses reminiscence therapy as a tool to enable people to talk about nostalgic memories, and by applying it to exhibitions, it is proposed that it would also be possible to hold in exhibitions that aim to create opportunities for dialogue.

Subsequently, based on these case studies of real activities, by reconsidering reminiscence therapy as a tool to talk about nostalgic memories and reflecting upon reminiscence therapy as part of exhibitions, the museum will transform the relationship between itself and visitors, and present the possibility of a new type of museum in which it becomes necessary for it to talk about itself. Moreover, by talking about nostalgic memories, museums may become facilities in which people are connected to one another.